

シニアこそ読もう『赤毛のアン』——心のみずみずしさを再び——

前文

名作『赤毛のアン』は、日本でも愛読者は多く、終戦直後から多くの女性、特に少女たちに読まれてきた。今年はその原作の出版からちょうど100年。すでにシニア世代に入った筆者男性もこの機に再度目を通してみた。そして作品の舞台の「今」を訪ね、カナダのプリンスエドワード島に飛んだ。それは、老いかける身体と心にみずみずしさを与えてくれる「ときめき」の旅となった。(文中の引用：松本侑子訳)

本文

実を言うと最初は少しだけ恥ずかしかった。

「いい年をしたオジサンが、なんでわざわざ少女物語の舞台を訪ねるんだい?」。どこかで“悪友”の冷やかし声が聞こえてくるような気がした。だが——いざ、心を定め、準備のためにもう一度読み直してみると、いやいや、どうして! 作品は若い女性ばかりでなく、中年女性も男性もシニアもすべての大人が読むべき本、また読み直すに値する文学、との確信を抱くようになった。とりわけ、身体だけでなく心までも枯れてきがちなシニア世代は!

今年は、日本でもNHKのテレビ番組をはじめ、100周年を記念するいろんな企画が生まれ、旅行社はキャンペーンツアーを催している。だが、皮肉にも、プリンスエドワード島は別として、カナダの一般市民の間ではそれほど意識が高くないのには驚いた。

成田から現地への直行便はない。乗り換えのためにトロントで一泊した。空港からホテルまで乗ったタクシーの運転手は、私のカナダ訪問の目的を聞くとこう言った。

「エッ グリーン・ゲイブルズって何ですか?」。わざわざ東京から訪ねてきたこちらが拍子抜けするような質問だった。

——ときは19世紀末。ところはカナダの北部東海岸にあるプリンスエドワード州。島のアボンリー村(実際にはキャンベンディッシュ村)にグリーン・ゲイブルズという農場の家があった(グリーン・ゲイブルズとは「緑の切妻屋根」の意)。

プリンスエドワード島は「波間に浮かぶゆりかご」の形をしている。アンの育ったセントローレンス湾に面したキャンベンディッシュへは、島の反対側にある州都シャーロットタウンから車で約40分。道路の両側には、赤土と緑ののどかな田園風景が広がっている。州政府は本年を「アン100周年の年」と決めている。シャーロットタウンの空港や街のあちこちにはポスターや案内板が目につき、書店には「アン特集」の本や写真が並べてあった。

6月半ば。訪れが遅い北国カナダの夏。グリーン・ゲイブルズのりんごの花がちょうど満開

だった。孤児院にいたアンが初めてグリーン・ゲイブルズに着いたのも6月。りんごの花が白く咲きあふれていたころだった。一人で置き去りにされた鉄道駅から、マシューが手綱をとる馬車でやってきたのだ。

ハウスには各国からの見学者が押しかけていた。地元カナダの各地、お隣のアメリカから。ヨーロッパは主に東欧の国々、アジアは日本、中国、韓国からが多いという。日本からは若い女性と中年の婦人のグループが目立った。それぞれ少女時代また青春時代に読んだアンの魅力に惹かれて訪ねてきたのかもしれない。

「プリンスエドワード島は、この世でいちばん美しいって聞いていたから、住んでみたらどんな感じか想像したものよ」(第2章 マシュー・カスバートの驚き)

アンは自分の目に映る周囲の木々や森、道路や湖水にも「想像力」を発揮して次々と名前をつけていった。「腹心の友」ダイアナと通った「恋人たちの小径」は今は新緑のまっただなだった。こぼれ日が路面に映り揺れている。高い樹木が密集した「お化けの森」では、倒れた古木がいかにもその趣をかもしれ出していた。

「アンをめぐる旅」の基点ともいうべきグリーン・ゲイブルズの家は、作者モンゴメリーの親戚が実際に住んでいたものだった。現在は小説の記述どおりに再現され、100年前の息づかいが感じられるようになっている。

家には60代のマシュー・カスバートと50代のマリラ・カスバートという独身の兄妹が暮らしていた。子どものいない二人は、年老いてくるマシューの農作業の手伝いのために、孤児院から男の子を引き取ろうと考えた。ところが、手違いでやってきたのは赤毛でそばかすだらけのやせっぽっちの女の子だった。

アン・シャーリー。11歳。

マリラは女の子は農作業の役に立たないと追い返そうと考える。ところが、アンの生き生きとした明るさ、可愛いおしゃべりにまずマシューがとりこになり、ほどなくマリラも彼女の生い立ちに同情、不思議な個性に魅せられ、引き取って育てることになった。

・・・マシューは口ごもった。「だが、そのう、あの子を引きとるのは、やっぱり難しいかのう」「当たり前ですよ。あの子が私たちの何の役に立つんですか」「でもなあ、わしらが、あの子の役に立つかもしれないよ」(第3章 マリラ・カスバートの驚き)

「わしらが、あの子の役に立つかもしれない」——なんと温かなマシューの心!やがて、マリラもアンを心底から愛するようになり、物語が進むにつれて彼女の情愛も一層深まっていく。

アンは感激の「ああ」を発すると、マリラの腕の中にぱっと飛びこみ、血色の悪い頬に、熱烈なキスを浴びせかけた。マリラにとって、子どもの方から顔にキスされたのは、生まれて初めてだった。またもや、例のはつとするような甘い心地に揺さぶられた。(第13章 待

ち焦がれる愉しさ)

「アン、一つ言えることはだね」マリラが言った。「バーリー家の屋根から転がり落ちて、あなたの舌は、かすり傷一つ負わなかったってことだ」(第23章 アン、名誉をかけた事件で、憂き目にあう)

今まで子どもを扱ったことのないマリラが、戸惑いながらもアンのしつけをしていく。話し始めたらしまらないアンのおしやべり。愛しているながらも、不細工がゆえにやさしく振舞えないマリラのアンに投げかける言葉も楽しい。

アンは島の美しい自然とマシューとマリラの愛情のなかですこやかに育っていく。学校では同級生のダイアナとの間に友情を培い、赤毛をからかわれた男子生徒のギルバートと反目。担任教師、牧師夫妻、そして周囲の多くの大人たちからの感化で、彼女は優しく賢い16歳の娘へと成長していった。

半面、それまで世間づきあいが苦手で、兄妹だけでさびしく生きてきたマシューとマリラも、アンを育てていくなかで、人を愛する喜び、人から愛される幸せを知って劇的に変化、心豊かな大人へと成長していくのである。

美しいものに憧れる乙女心。数え切れない失敗。それでも“想像力”を駆使し、決して希望を失わず、すべてに前向きに生きていくアンに読者は感動し勇気づけられる――

三人がいつも語り合っていた一階の居間。台所。アンがダイアナを招待したお茶会で間違えてスグリ酒を出した食器棚。二階の東向きのアンの部屋には明るい色の少女用ベッドのほか、マシューがアンに贈った、袖がふくらんだパフスリーブの衣装もかけてある。別棟(むね)の大きな納屋には当時の農作業道具が陳列され、中庭に置かれた馬車が100年前を忍ばせていた。

手前の広い駐車場には大型の観光バス4台と20台ほどの自家用車。「シーズンになると、この二倍から三倍になるんです」と係員。受付の建物の中では、モンゴメリーが使っていたタイプライターが展示され、短時間の紹介映画も見られるようになっていた。

このキャベンディッシュ村には、作者ルーシー・モード・モンゴメリーの生家、また彼女が働いていた郵便局もある。彼女が葬られた墓地は今、国立公園となっていて訪れる人があつとを絶たない。そこからやや離れたところにはアンが名づけた「輝く湖水」、その向かいにはグリーン・ゲイブルズ博物館が緑のなかに落ち着いていた。

訪島にあたって、私は本年4月からNHK教育テレビで始まった「3カ月トピック英会話『赤毛のアン』への旅――原書で親しむAnneの世界」を視聴するほか、都内で翻訳者の松本侑子講師が直接講義するセミナーにも出席した。六月初めには劇団四季が主宰するミュージカル「赤毛のアン」を鑑賞(ミュージカルは12日で終演)。そして島に着いた翌々日の14日からは物語の舞台の本場でのミュージカル公演が始まったのである。

毎年、夏になると催されてきた公演は今年で44回目。100周年の本年は特に力が入っている、という。1968年から足かけ10年間アンを演じ、今はロンドンに住む最初のアイランド人女優も来島していた。ガラ公演に先立って、全キャストが揃ってのサイン会と記者会見が行われた。私は前日のプレ公演の感想と日本での“アンブーム”を伝えた後、主役のアン、準主役のマシューにインタビューした。

アン（アミー・ワリス）：「記念すべき年の主役をいただいて光栄です。おしゃべりでチャージング。勇気もある。どこまでも希望を失わないアンは、永遠に私たちの“生き方の鏡”だと思います」

マシュー（サンディ・ウインスビー）：「高齢になるにつれて、身体だけでなく心まで枯れてしまう人も多い。年を取るほどにアンのような『心のみずみずしさ』が必要になってくと思う。作品は少女たちだけでなく、すべての大人に通ずることを訴えたい」

インタビュ어가終わると私はアンと並んでカメラにおさまった。私が差し出した原書の表紙裏にハートマークをつけてサインした彼女の言葉は：

“To Takeshi: Much love from Anne Shirley, Amy Wallis”（武さんへ：心からの愛をこめて——アン・シャーリーとアミー・ワリスより）だった。

日本のミュージカルもカナダのも、舞台の設営は8割方同じように思えた。どちらの公演でも、アン役の歌唱力、おどおどし口下手なマシュー役の演技が際立っていた。アンがマシュー、マリラの愛情の中で健やかに成長していく半面、育てる二人は年老いていく人生の無常。人間の情愛の深さ。マシューが亡くなり、アンが大学進学を断念、マリラを支え、再び自分の道を切り開いていくとする最終幕は、観客の誰もが涙を誘われ、感動を禁じえない。

ミュージカルのすばらしさは、舞台の設営とバックミュージックが、そして出演者の演技と歌唱が、活字だけでは表現できない情感を高めてくれることである。

一方で、原作にある登場人物の心理描写や美しい自然の情景描写となると届かない面もあるのはやむを得ない。原作を読むには如かず！ともあれ、映画、ミュージカルの特性を十分に堪能していくのに『赤毛のアン』は最適の文学作品の一つだと思う。

ところで、なぜこれほど『赤毛のアン』が日本で読まれるようになったのか。それは、まず原作のすばらしさ、誰をも魅了するアンのキャラクター、またマシュー、マリラの老兄妹がアンを育てることによって人間的に豊かになっていくストーリー、そしてプリンスエドワード島の美しい自然の描写などだろう。

主人公の魅力といえ、そのかわいなおしゃべりとあふれる想像力だ。

「いいお天気の朝で、とても嬉しいの。でも雨の朝も、好きよ。どんな朝でも、ワクワクす

るわ。今日の一日、これから何が起きるか、想像の余地があるでしょう」(第4章 グリーン・ゲイブルズの朝)

「私の経験から言うと、物事は楽しもうと思えば、どんな時でも愉しめるものよ。もちろん、楽しもうと固く決心することが大事よ」(第4章 アンの子い立ち)

「……寝室は、眠るためにあるんだよ」「まあ、マリヲ、夢を見るためでもあるわ。美しいものに囲まれた寝室の方が、いい夢がみられるでしょう？」(第19章 お茶会、悲劇に終わる)

すべてを前向きにとらえ、人生を楽しみ、夢を広げていくアンの生き方がほうふつとしてくる。

「人に謝って許されるって、ほっとして、気が楽になるわね。今夜は、星がきらきらしているわ」(第10章 アンのお詫び)

「明日は、まだ何の失敗もしていない新しい一日だと思うと、ほっとするわ」(第21章 風変わりな香料)

自分の失敗をすなおに詫げる純粹さ。また失敗の多い日々の生活のなかでの乙女のやさしい心に読者は親近感を抱き、さらに、明るく毎日を生きようとするその考え方を、自らの人生に取り込もうとするだろう。

次はそのタイトル訳。原作「Anne of Green Gables」を直訳すれば「緑の切妻屋根のアン」。作品を日本ではじめて翻訳した村岡花子は、当初「窓辺の少女」、「窓に寄る少女」「夢見る少女」といろいろ考えたようだ。結果的に、当時大学生だった娘の「『赤毛のアン』がピッタリだわ」との強い薦めに従って決まったのだという。この名訳！

もしこれが直訳の「グリーン・ゲイブルズのアン」あるいは「緑の切妻屋根のアン」だったら、これほどまでに読者を惹きつけなかったにちがいない。「赤毛」はブロードにも通じ、黒髪の自分たちとは違う異国の少女へのあこがれる的なものも含まれていたのかもしれない。「あかげのあん」との母音の繰り返しも耳にこころよく聞こえる。

彼女によって日本で最初の翻訳本が出版されたのは、終戦間もない昭和27年(1952年)。戦時中、カナダ人の宣教師からアンの原書を渡された村岡花子は、空襲警報が出ると家中の戸を閉めて、外に光が漏れないようにした電灯の下で訳し続けた。英語が敵性語とされていた中である。その彼女の勇氣とこの夢のあるタイトルこそ、アンブームをもたらした最大要因ではないかと私は思う。

翻訳者・村岡花子と私の最初の出会いは、彼女の最初の翻訳作品だった『王子と乞食』。戦後まもなく、家の経済にゆとりもなく、まだ本も少なく買えなかった当時、子どもたちに人気だった「カバヤ・キャラメル」の会社が、空箱を集めて送ると、児童文学本を送ってくれたのである。王子と乞食が入れ替わるという作品の奇想天外なストーリーに惹かれ、そのこ

ろから“文学少年”みたいな素地ができていったのかもしれない。

アンの取材を思いたった2年前、村岡花子の生地、山梨の文学館で彼女の足跡を紹介する展示会の現場を訪ねた。彼女が実質的に翻訳の仕事に取り組んだ場は東京大田区である。現在、「村岡花子文学館」があり、お孫さん二人が管理運営に当たっている。

以来、これまでに『赤毛のアン』は何人にもよって翻訳されてきたが、直近では松本侑子が挙げられるだろう。彼女は原作に引用されている文章の出典を詳細に調べ上げた。その注釈を読んでいくと、モンゴメリーがシエクスピア、バイロンを初め、ヨーロッパの歴史上の作家の作品や、キリスト教文化の原点・聖書から数え切れないほどの引用をしているのがよくわかる。

それに100年前のカナダの生活描写は、自分たちシニア世代の半世紀あまり前の子ども時代をも懐かしく思い出させてくれる。

その一：

孤児院にいたアンは、いろんないきさつがあったが、結果的にマシュー、マリラ兄妹の家で育ててもらえるようになり、学校にも通えるようになった。

登校の初日に事件は起こった。クラスの男の子ギルバートから、彼女が最も気に入っている赤毛を「ニンジン、ニンジン」とからかわれた。怒ったアンは、使っていた石板を彼の頭上に打ち下ろしたのである。

石板といえば、終戦後3年目に私が入学した長野県の小学校のクラスでも使っていた。すべてに物資欠乏の時代だった。ノートは茶色がかったざら紙。教科書の一部さえも兄からの“おさがり”だった。つぎのあたった衣服は当たり前。昼食の弁当を持ってこれない同級生もいた。それでも休み時間には、黒板に相合傘の絵を描いて遊んでいたのが、アンのクラスとも共通していて懐かしい。

ギルバートは頭脳も性格もよい好男子だった。アンの反目は続くが、最終章で仲直りをする。後に続く「アン・シリーズ」では、二人は結婚をし幸せな家庭を築いていく。その出だしにこんなエピソードの伏線を置いたたぐいまれな作者の構想力！しかも「叩き割ったのは石板で、頭ではなかったが、真つ二つに割れてしまった」（松本侑子訳）と、ユーモアのある表現も面白い。

その二：

ときどき出てくるアンの無鉄砲さは夏目漱石の『坊ちゃん』をほうふつとさせる。正義感にあふれ、負けん気の坊ちゃん「そこからは無理だろう」とからかわれて、二階から飛び降りて怪我をする。

アンはダイアナの家のお茶会で、仲間とのひよんな駆け引きから、引くに引けず、屋根の棟（むね）を歩き、転げ落ちて足首を骨折する。アンの具合を心底から気づかうマリラ。初めは家におくことを断っていた彼女も、この時点ですでにアンが自分たちにとってどんなに大切な存在になっているかに気づくのである。

そのほか、ちょっとした取り違えで、ダイアナにお酒（果樹酒）を飲ませてしまう話。

小船に横たわって川に流されていくお姫様のまねをして溺れ死にそうになり、“心の敵”ギルバートに救出される話など、エピソードに事欠かない。日本文学の傑作に類した点があるのも、親しみを感じるところだ。

島をめぐる旅のなかで車椅子の日本婦人に会った。Kさん。宮崎から羽田、成田、トロントの空港を経由して州都シャーロットタウンへ。60歳の誕生日を祝い、娘二人が旅をプレゼントしてくれたのだという。リウマチで足が悪く、娘の一人が付き添って人生で初めてとなる海外旅行だった。

「車椅子で大変だと思いましたが、カナダに着いてみると、障害者にみんなとても親切で感動しました。アンは40年前に村岡さんの訳で読んで以来、その舞台を訪ねるのが夢でした。アン・シリーズも全部読みました。プリンスエドワード島は、牧歌的な広々とした光景で心が洗われる思いです。空気が澄んでいて、持病のリウマチもあまり気にならなかった。何があってもくじけないアンの生き方は、40年来の自分の支えでもありました。送り出してくれた娘たちに、親切に面倒を見てくださったカナダの皆さんに心から感謝しています」

身障者にとって、旅は最高のリハビリだとも言われている。身体移動に伴う自信と同時に、心の刺激とときめきも得られるからだ。夢を抱いて努力していれば、いつかは実現できる。アンが教えてくれた一つの具体例だろう。

一方、マシューは、世間づきあいが苦手で口下手の60代の独身男だった。マリラも質実のみを重視する気質の50代の独身女性だった。その二人がアンに感化されて、慈愛深く心豊かな大人へと劇的に変わっていく。その人間としての幅の広がりや心の深まりが、同じ年代にある自分たちにも、いろんな示唆を与えてくれるような気もする。

「大人になるというのは、つまらないものなのね。ようやく分かりかけてきたわ。子どもの頃、ほしくてたまらなかったものでも、大人になって、いざ手に入れてみると、もう半分もときめきが薄れているのね」(第29章 一生忘れられない思い出)

「ああ、野心を持つって、わくわくするわ。私には、目指す野心がたくさんあって嬉しいわ。野心には終わりが無いもの。それがいちばんいいことだわ。一つの野心を達成すると、すぐにまた別の野心が、もっと高いところで輝いている。これだから人生は面白いわ」(第31章 クイーン学院の女子学生)

少年少女時代には夢があった。青春時代にはその夢に向かって挑戦した。だが、歳を重ねるにつれて夢を失い、身体だけでなく、心まで枯れてしまう人も多い。いつまでもときめきと野心を持ち続けたい。歳をとるほどにアンのような心のみずみずしさを持ちたいものだ！
今は“Seniors be ambitious.”(シニアよ、大志を抱け！)の時代である。旅には刺激と「ときめき」が詰まっている。本にも刺激と「ときめき」、さらに人間の生き方が詰まっている。読書はお金もかからない。物語の展開に胸を躍らせるなかで、いつのまにか心の若返

りにつながっていることも多い。

古典は何度読んでも新しい発見がある。『赤毛のアン』に限らず、年を取ってから青春時代の本を読み直す、また新たな作品にのめりこむところに、心のみずみずしさが湧いてくるのではないか。

「クイーン学院を出た時は、私の未来は、まっすぐな一本道のように目の前にのびていたの。人生の節目節目となるような出来事も、道に沿って一里塚のように見わたせたわ。でも、今、その道は、曲がり角に來たのよ。曲がった向こうに、何があるか分からないけど、きっとすばらしい世界があるって信じるわ」

——そして道には、いつも曲がり角があり、そのむこうには新しい世界が広がっているのだ！！（第38章 道の曲がり角）

最終章——競争の激しい大学への奨学金試験を勝ちとり、洋々とした前途が開けた矢先にマシューの突然死と、グリーン・ゲイブルズを手放さなくてはいけないというマリラの苦悩……。それを知ったアンは、ここまで育ててくれた二人への恩と愛情に、進学をあきらめ村に居残ることを決める。成長したアンの言葉である。

シャーロットタウンからキャベンディッシュへの道は、なだらかな上り坂と下り坂、曲がり道の連続だった。順調に見える人生も、途上で何が起こるかわからない。人生の岐路で、思いがけない障害に直面することもある。そのときに、アンのようにすべてを前向きにとらえ道を切り開いてほしい——これこそモンゴメリーが読者に伝えたかったメッセージではないかと思った。

プリンスエドワード島

大西洋岸の北部にあるカナダでは一番小さな州。島の名前はイギリス国王ジョージ3世の王子にちなんで付けられた。1864年、カナダ連合政府の代表が集まって、カナダ連邦の結成についての会議が開かれた歴史的な場所でもある。なによりもこの島を世界的に有名にしているのは小説『赤毛のアン』。作者ルーシー・モード・モンゴメリーの故郷であり、物語に登場するアンゆかりの場所があり、美しい牧歌的な光景が広がっている。

旅の舞台裏

定年8年目。67歳の私は現在、シルバー人材センターで駅前の自転車管理の仕事を週3日ほどと、元の職場で週2日のアルバイトをしている。年金生活者の旅である。費用は最低限に抑えなければならない。作品からして、当初は「妻も一緒に」とのつもりだったが、旅費が予想外に高くなり無理となった。「燃油サーチャージ」（いわゆる石油の高騰に伴う乗客の負担金）である。格安のフライトはなんとか確保できたが、それにプラスすること4万円。

二人だと8万円になる(7月からはさらに一人5万6千円に上がっている)。それに明年は夫の海外赴任に同行した娘と孫のところにも行かなければならない。重なる出費予定に「あなた代表して」との妻の言葉に送られての旅となった。

石油といえば、カナダで宿泊ホテルのテレビをつけると、世界的なニュースのネットワークを持つCNNが、石油危機の未来について特集番組を放送していた。その中でのある専門家の発言が気になった。「最悪のシナリオ。それは数年後には石油をめぐる戦争が起こるかもしれないことだ!」

#

#

#

プリンスエドワード島の州都シャーロットタウンの空港からトロントに戻る便は朝6時発の一日一便のみ。帰国日。まだ暗い空港に着くと、思いがけないニュースが待っていた。「昨夜、トロントの空港がサンダーstorm(雷風)に襲われ閉鎖された。その流れで、今朝のトロント行き便はキャンセルになっています」

なんとということだ!きょう帰れなければ帰国後の日本での予定が大幅に狂ってしまう。しかも、一日延期によるホテル等の滞在費用も自然災害だから航空会社からは出ないという。翌朝、今度は飛んだ50人乗りの飛行機でトロントに着くと、成田行きフライトのエコノミー席は満席だった。とはいえ、航空会社としては、キャンセルで一日延びた我々も乗せなければならぬ。その結果、自分ほか何人かは空いていたビジネス席へ案内されることになった。食事や飲み物もレベルが上がった。シートはゆったりとゆとりもある。おかげでこの草稿も機内でゆっくりまとめられる、というおまけもついた。

人生の大事ではない。アンの言葉を軽く扱ってはいけぬが、次のようにジョークをこめて言えるかもしれない。「キャンセルという曲がり角の向こうには、思わぬラッキーが待っていた!」